

## P-329

## 癌性胸膜炎における胸水中HGF値の検討

西尾市民病院呼吸器内科<sup>1</sup>名古屋大学第一内科<sup>2</sup>○西川満則<sup>1</sup>，土屋良記<sup>1</sup>，中根幸雄<sup>2</sup>，野崎裕広<sup>2</sup>

【目的】肝細胞増殖因子 (hepatocyte growth factor : HGF) は、肝細胞のみでなく生体において多彩な生理作用を有するサイトカインであり種々の疾患の病態への関与が報告されている。今回我々は、癌性胸膜炎を中心に胸水中のHGF値を測定し検討した。

【対象と方法】対象疾患は癌性胸膜炎15例（腺癌6例 小細胞癌5例、大細胞癌4例）、炎症性胸膜炎8例（肺炎随伴性6例、結核性2例）、心不全による漏出性胸水貯留例7例の計30例である。胸水中HGF値の測定はELISA法を用いて測定した。

【結果と考察】癌性胸膜炎の胸水HGF値は (1.27±0.5ng/ml) であり、炎症性胸膜炎では (2.57±1.3 ng/ml) 心不全による胸水では (0.55±0.2 ng/ml) であった。癌性群、炎症性群、心不全群で各々に統計学的有意差が認められた。胸水中のHGF値は、癌性群、炎症性群、心不全群の鑑別に有用である可能性が示唆された。

## P-331

## 肺癌化学療法後rhG-CSF使用時の好中球機能に関する検討

東京女子医科大学第一内科

○鏑木孝之、稲野秀孝、林光俊、吉野克樹、永井厚志

原発性肺癌の化学療法後の好中球数減少に対し rhG-CSFの投与が行われている。好中球数自体は明らかな増加が認められるものの、その機能についての検討は十分行われていない。化学療法後の好中球減少に rhG-CSFを投与した際の好中球の成熟度、機能について経時的に検討した。

【対象と方法】プラチナ製剤を含む複数の抗癌剤投与により好中球数が減少し rhG-CSFを投与した患者を対象とした。末梢血球数、血液像、好中球の成熟度の指標としてNAPscore、白血球の殺菌能の指標として過酸化水素産生能、およびG-CSFreceptorを測定項目とした。化学療法前、rhG-CSF投与前、投与後1、6、12、24、48、120、150時間に測定した。

【結果】化学療法開始後平均10日で rhG-CSFの投与を開始した。好中球数は化学療法開始後15日に最低値をとった。NAPscoreは好中球数には影響を受けず、rhG-CSFの投与後次第に増加した。過酸化水素産生能は rhG-CSFの投与後増加傾向を示したが、一過性に低下する症例もみられた。

【結論】 rhG-CSFの投与下にも好中球の成熟度は保たれていたが、殺菌能に関しては一時的に低下する症例もみられた。

## P-330

## 肺癌組織における Thymidine phosphorylase の定量的検討

磐田市立総合病院外科<sup>1</sup>、同内科<sup>2</sup>、浜松医科大学第一外科<sup>3</sup>○豊田 太<sup>1</sup>、安田和雅<sup>2</sup>、佐藤雅樹<sup>2</sup>、鈴木一也<sup>3</sup>

【目的】Thymidine phosphorylase (以下TdRPase) は、ヒトにおいてピリミジン系ヌクレオシドを加リン酸化分解する酵素であり、癌の増殖等に関与すると考えられている。肺癌での定量的検討を行った。【対象と方法】肺癌手術症例48例(腺癌30例、扁平上皮癌18例)を対象とした。摘出標本より腫瘍並び肺組織を採取し、ロシュ研究所の協力でELIZA法にて測定した。肺癌の組織型、分化度につき定量的検討を行った。【結果】腺癌のTdRPaseは、115.8±102.2(U/mg prot以下略)、肺組織39.6±39.0で有意差があった(p<0.001)。扁平上皮癌でも、211.7±353.5、肺組織35.1±33.5で有意差があった(p<0.05)。両癌間では有意差が認められなかった。腺癌につき分化度別の値は、高分化99.3±86.0、中分化122.4±132.9、低分化194.2±134.3で、有意差はないが、分化が低いほど高い傾向があった。扁平上皮癌では、高分化413.7±659.3、中分化106.7±98.3、低分化165.8±82.5であった。【結語】TdRPaseは、腺癌、扁平上皮癌組織で高く、腺癌では分化度の低いものほど高い傾向がみられた。扁平上皮癌では一定の傾向が認められず、今後の検討が必要と思われた。

## P-332

## 有茎肋間筋弁で断端被覆を行った肺癌症例

昭和大学医学部第一外科<sup>1</sup>，同 放射線科<sup>2</sup>，同 第一内科<sup>3</sup>○門倉光隆<sup>1</sup>，片岡大輔<sup>1</sup>，山本 滋<sup>1</sup>，野中 誠<sup>1</sup>谷尾 昇<sup>1</sup>，高場利博<sup>1</sup>，櫛橋民生<sup>2</sup>，笠原慶太<sup>3</sup>

【目的】術前後に積極的な補助療法を施行する症例の増加とともに一側肺全摘除術後に気管支断端瘻の発生がみられることから、有茎肋間筋弁による断端被覆を行い良好な結果を得た。【対象】過去1年間に当科で入院治療を行った肺癌58例のうち、一側肺全摘除術を施行した症例は6例で、このうち4例に術前化療あるいは術後化療、放治を行い、術後断端瘻予防を目的として手術時に有茎肋間筋弁による被覆を行った。【症例】症例1：右肺門部扁平上皮癌に対して術前化療を施行したのち肺全摘+縦隔リンパ節郭清とともに予め作成した有茎肋間筋弁で気管支断端被覆を行った。症例2：縦隔リンパ節転移を伴う肺癌に対する術前化療が著効を示し、手術時に肋間筋弁による断端被覆を行った。症例3：右肺門部扁平上皮癌に対して全摘を施行した際に広範なリンパ節転移を認め、術後積極的な補助療法を目的に有茎肋間筋弁による断端被覆を行った。症例4：右肺門部扁平上皮癌の縦隔リンパ節転移に加え心膜合併切除を要したため、術後補助療法を考慮するとともに心膜補填への応用を目的に有茎肋間筋弁による断端被覆を行った。【結語】術前後に積極的な補助療法の選択を目的とした有茎肋間筋弁による気管支断端被覆に加えて心膜補填を行い、断端瘻予防とともに自己組織の応用としても有用と考えられた。